

輪廻体験 1991年 人文書院

片桐すみ子(かたぎりすみこ) 編訳

南山大学文学部卒。(株)豊田中央研究所をへて、現在フリー ランサーとして産業翻訳などに従事。

第1章 前世療法の実際

Garrett Oppenheim

「Who Were You Before You Were You?」

筆者ギャレット・オッペンハイムは医療ライターを経て心理学の学位を取得。催眠療法家となる。現在ニューヨークで開業中。

第2章 何処へ行った?ナチス大虐殺の魂

Yonassan Gershon

「Are Holocaust Victims Returning?」

筆者ラビ・ヨナサン・ゲルジョムは米国ミネソタ州でユダヤ教の伝統的儀式やニューエイジ意識などを教えている靈的指導者の一人

第3章 異端カタリ派—輪廻転生を信じた最後のキリスト教徒

Harvey Humann

「The Great Heresy」

筆者ハーヴェイ・ヒューマンは米国カンサス州の実業家

第4章 宇宙からの帰還—臨死体験者の証言

Myra Ka Lange

「To The Top Of The Universe」

筆者マイラ・カ・ランジは米国アリゾナ州在住の画家

第5章 惑星を旅する死後の魂

Ed Mc Eowen

「Citizens Of The Cosmos」

筆者エド・マコーワンは米国ミズーリ州の農業経営者で占星術師

第6章 キリストの前世—葬られた輪廻思想

Glenn Sanderfur

「Jesus' Past Lives?」

筆者グレン・サンダーファーは米国ヴァージニアビーチ在住

第7章 パットン将軍—生死を繰りかえす戦士

Karl F. Hollenbach

「Patton : Many Lives, Many Battles」

筆者カール・F・ホーレンバッハは米国ケンタッキー州に在住

第8章 夢実験—もう一つのリアリティを求めて

G. Scott Sparrow

「How To Induce Lucid Dreams」

筆者G・スコット・スパローは米国ヴァージニアビーチ在住のカウンセラー。心理療法家。

第9章 「偶然の一致」の不思議—共時性を読みとく

Christopher Fazal

「Guidance Through Synchronicity」

筆者クリストファー・フェイゼルはARE教育開発コーディネーター

第10章 意志の神祕力—輪廻を超えるために

Robert M Witt

「The Magical, Mysterious Human Will」

筆者ロバート・M・ウィットはハワイのホノルルにあるシュタイナー教育のヴァルドルフ学校の校長

第11章 チャネリング—未来生への水先案内

Interview : Jack Pursel / Lazaris

第12章 苦しむことの意味—「目覚め」へのステップ

Interview : Jacob Needleman

「How Do We Find Meaning In Life?」

筆者ジェイコブ・ニードルマンはサンフランシスコ州立大学哲学教授。東西の哲学、神祕主義に精通し、グルジエフ研究家としても著名。

第13章 宇宙存在みな家族—ダライ・ラマのことば

Interview : A Visit With The Dalai Lama

第1章

私の信念

私が輪廻転生について語るときにはいつも、人は私がどのような観点に立ち、どのような信念を持っているのかということを、当然ながら知りたがるものである。私はかなり疑いを持ってこの分野に足を踏み入れたのだった。その時には、ゼルダ・サブリーに退行催眠をかけてもらっても、夢によく似たおもしろいたとえ話だ、ぐらいにかたづけていた。しかし何年たってもこのことが心を離れず、結局私はこれをもっと真剣に受けとめはじめたわけである。

前世療法を行うようになって、私の仕事が次第に心に根を下ろした確固たる信念に基づくものだとはっきりと実感するにいたった。そのうちのめぼしいものをあげてみよう。

1 輪廻転生の概念により人生に恩寵と意味がもたらされる

輪廻転生という概念によって、私たちは死によって消滅するのではない、と確信できるばかりでなく、不運あるいは幸運が永遠に続くという恐怖からも解放される。この概念は雨が木に必要な水分を惠んでくれるように、人間という生き物の必要を満たしてくれる。たしかに自然は、あらゆる生き物の必要を満たしてくれるものようだ。したがって地上の生物のうちもっとも素晴らしい精妙な人間を、自然が見捨てるはずがあるだろうか。

2 カルマは輪廻の論理である

今生の人生は、過去に犯した過ちを正す機会であるか、もしくはさらに重要なことだが、やり残した仕事を完成するチャンスである。私は患者二人に次のような話ををして、自殺を思いとどまらせたことがある。

「自殺してもまた最初からやり直すことになるだけです。今生で問題にしっかりと取り組んで、次の人生ではスタートを有利なものにしてください」

3 過ちや失敗に感謝るべきである

過ちや失敗はカルマの上で何かを学ぶよい機会である。悔うことより、過ちを検討して、よりよい方法を求めてたゆみない探究を続けるべきである。私は患者に—そして自分自身にも—いつも間違いを恐れないように、と言うことしている。今生それを正せなかつたとしても、またの機会があることだろう。

4 成功に対する恐怖は失敗に対する恐怖より強い

金持ちになれば泥棒にねらわれ、有名になれば批評家や競争相手にたたかれる、といった具合に、上のほうにいけばそれなりの苦労がつきまとう。新しい考えを新奉するようになれば、私たちは未知の領域に足を踏み入れるようだ。私は患者に対して—自分に対しても—心配事など笑いとばしてしまえばよろしい、と言っている。成功の代価は高いかもしれないが、その価値はもっと高いのだ。それは今生に幸福をもたらすばかりか、さらに私たちをもう一段上へと進めてくれるのである。

5 傷ついてもなお人を愛する

他人を心から深く愛することは、あなたに幸福をもたらす力ばかりでなく、あなたを傷つける力をも相手にゆだねることである。だが愛すること以外に、今生

であろうと別の人生においてであろうと、あなたの信念が正しいことを確認する、これ以上の素晴らしい方法があるだろうか。

輪廻転生の問題に結論がでていないことは承知しているが—結論がでれば、現在の私たちの考えは稚拙で単純なものとなるう 私はこう堅く信じている。自分はこの肉体に宿るずっと以前から存在しており、肉体を去った後もなお長く存在しつづけるであろうと。

第2章

戻ってきた魂とベビーブーム世代

ナチスによるユダ太人大虐殺の前世の記憶を持つ人々 (*事例のうち最初のものはドイツがポーランドに侵攻しユダヤ人を虐殺した1939年9月、最後のものは1970年代中期。大多数は十代以前に亡くなっており、彼らが未熟なまま夭折した命を完結するため戻ってきたことがわかる—原著者注) は、ほとんどが1946年から1953年の間に生まれた人ばかりで、現在三十代半ばから四十代である。いうまでもなくこれは「ベビーブーム」世代であり、のちの1960年代になって公民権運動(人種差別撤廃をめざした運動。この結果1964年に公民権法が成立した—訳者注)で活躍し平和運動を創始したのはこの世代だ。この何百万という魂は、自分たちの体験した惨事が二度と起きないように、できうるかぎり早く転生して戻ってきたのではなかろうか。

驚くべきことに、私の会った大虐殺の記憶保持者のほとんどはユダヤ人ではなかった。なんらかの形の心霊的リーディングを受け、その内容を私に教えてくれた人がいるが、その中で、自分が前世で信心深いユダヤ人だったと信じている人はほとんどいなかった。むしろ大多数の人にとって、ユダヤ教はたまに接するだけのもので、日常的な生活の中心には置かれておらず、みなユダヤ人の本流から外れているように思われた。もしこれが事実なら、ナチスによってユダヤ人を表す黄色い星のしるしを強制的につけさせられ、あらゆる辛苦と屈辱をなめたのち殺されたことが、彼らにとって初めてのユダヤ人としての経験だったことは想像にかたくない。ユダヤ教にまつわる楽しく素晴らしい祭りや休日、祈り、儀式などを昔体験したことがないれば、そのような魂たちは「ユダヤ人であること」は苦しむことの同義語である、と誤って結論づけてしまうことだろう。だからこそ今生は、非ユダヤ人の肉体を選んで転生してきたのではなかろうか。

これを裏付ける奇妙な事実は他にもある。事例のうち三分の二が金髪で、青あるいはうす茶色の眼の持ち主なのだ。最初私は、これはミネソタ州に北欧系の人が多いせいだと思ったが、全国を歩き回ってみて、他の母集団(調査対象となるサンプルを抽出する、もとの集団—訳者注)でも同様であることがわかった。多くの人がこのような髪や眼の色をしているのは家族で自分一人だけである、と語っている。あの親族は髪も眼も黒っぽいのだ。遺伝学的には金髪も青い眼も劣性形質で何代か間をおかないと発現しないため、大虐殺で死んだと信じる人々の間でこのように高率で現れるのは、さらに奇妙なことである。

周知のようにナチスは、金髪碧眼の「アーリア人」を理想にかかげる、人種的優越の疑似理論に重さを置いてきた。ヨーロッパのユダヤ人の大多数は(多くの非ユダヤ人も同様だが)黒っぽい眼や髪をしているから、これは、迫害者と同じアーリア人によく似た容貌をそなえて生まれてくることを魂が一心に望んできた結果である、とも想像できる。もしこの考えが深く頭にこびりついていたとすれば、これ以上迫害されずにすむと信じた魂が、金髪の肉体に引きつけられるのもうなづける。

第10章

自由意志は人間の本性—シュタイナーの理論

シュタイナーはこれを「意識魂」の時代、すなわち人間が自分たちの思考に活気を与えて科学や芸術や宗教を、人間の本性や意識の境界という一つの幅の広い観念へと統合していく時代であるとしました。彼は意志の力を発達させることが、この過程、とくに道徳的な方向に沿って意識の成長を続けていくために必要だと考えたのです。

今日、現代生活のストレス解消のためには体を動かす必要があるということが認識されていますが、それと同じで、習慣的に意志を鍛える必要があるということも認めていかねばなりません。事実、意志は筋肉のようなものだと考えられるのです。

ヴァルドルフ学校(シュタイナーが彼の理念に基づく教育を実践するため1919年に創設した学校。1984年現在世界に三百校ある—訳者注)の教育者として名高いヘンリー・バーンズはこう書いています。

「現在子供時代を過ごしている人々には、将来、身体の強さや意志の力が多いに要求されることになろう。今の時代の趨勢がこのまま徐々に進むにつれ、意志の力は弱まり肉体のバイタリティーも退化していく。人間の労力に取って代わる機械があれこれ発明されたおかげで、意志はさらに受身になっていく。ここ一番が強さが必要だ、というとき、私たちは少なくとも意志を奮いたたせるくらいのことはできなくてはならない。いったんなまったく筋肉を一日で鍛えることなどできはない。内なる意志の強さという筋肉は肉体の物理的な筋肉に比べて、発達させるには時間がかかり、より困難なのである。」

シュタイナーは、意志の自由こそが人間の本性の神髄であるという考えを確立しました。彼は現代には意志の自由と意志の働きを脆弱にする傾向があることを看破し、私たちの時代の世俗的な物質主義に対する解毒剤として意志を強化しようではないか、ということを言っています。

もう一人のヴァルドルフ学校の教育者、ヒルデガルト・ゲルベルトは、「確かに意志は鎖につながれており、教育者が取り組むべき問題は、意志を鎖から解き放って強いものにしてやることである」と書いています。このテーマはシュタイナーの『靈的活動の哲学』に展開されており、その中で彼は「この時代の人間の発展がめざすのは、意志を自由で創造的な直感にたちいたる思考にまで変えていくこ

とができるようになることだ」と述べています。

シュタイナーの説く人間の本性についての理論では、魂には三つの異なった現れかた—すなわち思考、感情、意志—があるとされています。この三つには次のような特性があります。

- ◇ 考えているとき、私たちは完全に意識している
- ◇ 感じているときには、半ば意識している
- ◇ 意志を働らかせているときには、意識していない

このような見方で人間の本性というものを考えてみると、考えることは意志を働かせることの反対の極にあり、感情はこの二つの仲立ちをするものということになります。

考えることは魂の三つの現れかたのうち、もっとも意識的なものです。私達は考えるとき、自分の考えていることに気づいています。後になってから自分の考えてきたことを反省することもできます。また、私たちは自己の存在を意識できますから、時を経て考えがどれだけ進歩したかをはかることができます。

思考よりさらに不思議で神秘的なものである意志は、意識的な理解を越えるものです。ウィリアム・ジェイムズ(アメリカの心理学の礎石となった『心理学原理』の著者。アメリカ思想の柱、<プラグマティズム>の提唱者でもある—訳者注)は意志がいかに不思議な働きをするかについて書いています。彼が語ったのは、ある寒い雨の朝に目を覚ました人の話です。その人はどうやって起き上がってベッドをでようかと思案しています。もちろんほんとうは起きたくないので、考えれば考えるほど起きるのがおっくうになります。ふと気が散って彼の思考は別の方へと漂い去っていきます。これが不思議な一瞬です。自分が何をしているのか気づかないままに彼は起き上がり、ベッドを出て部屋着を着るのです。どのようにしてこのようなことが起きたのでしょうか。

思考と意志の間にるのは、感情です。感情は意識されませんが、努力すれば自分の感じていることと接触を保つことができます。また努力すれば感情がどのように私たちの思考や行動にたえず影響を及ぼしているかを理解することができるようになります。これには訓練を要しますが、可能なことです。

これらの三つの魂の働きの現れかたは、目覚めている状態と、夢みている状態、眠っている状態に相等するものです。日常生活では、この三つの現れかたあるいは意識の諸レベルはみな同時に起きています。これらの魂の三つの形式を人間にたとえて言いあらわすこともできます。

意志のかわりに、壁を造っている石工や煉瓦を積む職人のような、体を使って働く人々を思い描いてもいいでしょう。彼の目と手はぴったり呼吸を合わせて働いますが、動作はほとんど自動的に行われます。彼は、自分のしていることや、どうやって体を動かしているかについて、あまり意識していません。もし動作のたびに手を休めて考えていたら、仕事の速度は落ちてしまいます。

感情のかわりに、意識下に潜む人間の感情を読みとることのできる、詩人を想像してもいいでしょう。彼は感情のエネルギーやパターンを、言葉やイメージに翻

訳することができます。

思考のかわりには、意識の知覚を通じて収集されたデータを骨折って調べ、理論を組み立て、自分の理論が正しいかどうかを試す科学者を思い描くとよろしい。